

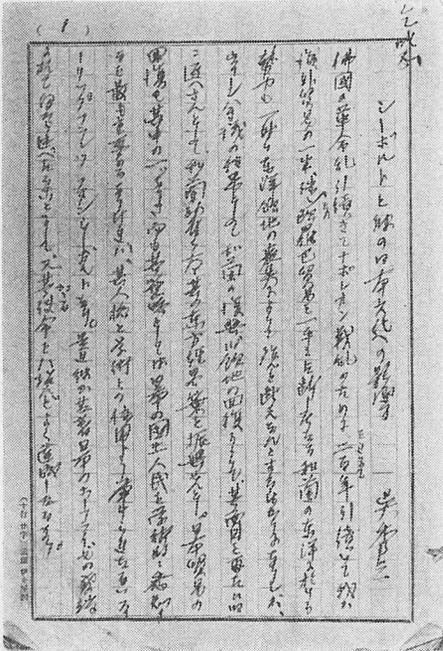
# シーボルトと彼の日本文化への影響

呉 秀 三二

(校注 岡田靖雄)

仏国の革命乱引続きてナポレオン戦乱のために、それまで二百年引続いて我が海外貿易の一半、殊にその歐羅巴貿易を一手に占断し居たる和蘭の東洋に於ける勢力も一時は東洋領地の喪失によりて殆んど絶えなんとするばかりになりしが、

ウィーン会議の結果として和蘭の復興、旧領地の回復なりて、其面目を再び旧に返へさんとして、和蘭政府は大に其の東方経略策を振興せんとし、日本貿易の回復も其中の一つなりき。而も其策略としては日本の国土人民を学術的に悉知するは最も主要なる「こと」なりければ、其人格と学術との信用より挙げられたるはフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトなり。是れ彼が其著『日本』のホーフライゼの<sup>(1)</sup>発端に於て自から述べたることにして、又かゝる使命をば殆んどよく達



成したるなり。

シーボルトは一八二〇年ウエツブルグ大学を卒業して暫時その近傍の地に開業してありしが、和蘭の右の如き政策あるを聞いて、平生の志望み已難く自から和蘭に赴きて其任に当らんことを希望し、遂に許容せられて第一の衛生士官として一八二三年三月爪哇に到着し、総督ファン・デル・カペレン v. d. Capellen の命令にて日本に派遣され、*Entusiasmus und Ausdauer, welche uns die Geschichte aus dem Leben der Naturforscher und Reisenden aufbewahrt* を自分にも期して *Wissenschaft* の *Verherr und Beförderer* の *Opferherd* に臨まんとも辞せざる決心を以て、此遙かなる東国日本に來れり。二十八歳の青年として気鋭く志確く医学動植物学は本来素養の学問なり。人類学人種学言語学・地文学は多年の間に漸染して忘れぬ知識なり、彼は我日本に關する万有学上の講究、人種学上の研索、制度・政治・産業・学芸等の取調を了り、日本の国土人民を知悉して日蘭貿易の發達に資せんとし、学識の深遠なると用意の慎重なるとは大いに東印度政府が当初の目的に副ひて遂に日蘭外交の十九世紀に於ける掉尾の振興を促がし身自からは日本近代文化の扶植者と謂はるゝに至りたり。余は此篇に於て彼が我日本に学問上・文化上に与へたる影響に就いて、主として日本に残されたる功績を本として陳述を試みんとす。

シーボルトが日本に關する研究及び知識は一つは彼が渡來の当初是迄の蘭館学者（即ち医師といつてもよい位殆んど皆医師なりき）が皆然りし如く出島と云ふ長崎市辺の一小築島及び後に活動区域を拡大されて長崎に於て得たるもの、又一つは彼が初めは毎年、中には隔年、後には五年目に和蘭人がなせる江戸参府の旅行中に於て得たるものなり。

先づ彼が長崎に於いての研究及び其周囲に対する影響について述べべし。彼は一八二三年に出島に到着してより、その学問才識は早くも日本人間に称へられ、長崎近傍より漸次諸方に敷及して遂には北海道の方にも延びたり。是迄蘭館の医師は広く自由に日本人（医師なりとも）と交際するを許されず、たゞ出島構内に於て少数の範圍なる医師に接し、又その媒介によりて極希に破格的に病人を診療するのみなりしが、シーボルトの時にはその名の高くなれるとともに長崎奉行

Gouverneur も特に彼の一週何回と云ふ制限はありながら長崎市中に出でて吉雄又楢林と云ふ医師の家又塾に臨みて診療することを許し、遂には一大破格を以て市の東南郊の鳴滝といふ所に土地家屋を求めて、こゝに諸生を置き又一週一回、出張して治療もし、講義もすることを許すに至り、それより前又かくの如くなりて日本の其頃の学生は河の海に注ぐ如く、星の北斗に向ふ如く相ひ聞き相ひ誘ひ争ふてシーボルトの膝下に来りて其教を受け其談を聞かんとし、之につけては又四方の病人も多数にこゝに集まつてシーボルトの治療を受けたり。彼自から記して云ふ “Bold ward Nagasaki der Sammelplatz japanischer Freunde europäischer Wissenschaft. Von diesem kleinen Punnte ausbreitete sich allmählich ein neuer Strahl wissenschaftlicher Bildung und mit ihm innere Verbindung über das japanische Reich aus” (Sarbouds “Nippon”). 余は此言を以て少しも誇張ありとは認め得ざるなり。此時に当りて時勢はケンペル、チュンペリー等彼の前駆者が渡来せし時とは大分に進展して、日本に於ける西洋学問の情勢も進歩し居たりしかば、シーボルトの学問及び研究に付いて理解もし、助力したるものも多かりし。是れシーボルトの功業を恢弘したる所以なりき。此時の長崎奉行高橋越前守（一七五八—一八三三）は嘗て松前奉行としてゴロニン事件を処置して誉れありし人にて、此人の好意は学問の受業のため出島に出入することを許し、当時の町年寄（市長）高島四郎大夫（一七九八—一八六六）（幕末に有名なる西洋兵学家）久松碩二郎（一七九六—一八三七）の兄弟（苗字は違へど実の兄弟なり）が日本の学者又医師との交際又外出治療に便宜を与へ、かゝる故を以てならん、通詞の頭領たる石橋助左衛門（一七五七—一八三七）・当時随一の蘭語学者吉雄權之助（一七八五—一八三二）其他の通詞及び長崎の医師吉雄幸載（一七八八—一八六六）・楢林宗建（一八〇二—一八五二）・楢林榮建（一八〇一—一八七五）等が好意と熱心とを以て、その事業を助けたるなり。シーボルトが長崎に於てその門下生として薰陶せる人々の中には俊才の人傑出の士多かりし中にも、シーボルト自身書き置きたる湊長安（一八三八死）・美馬順三（一七九五—一八二五）・岡研介（一七九九—一八三九）・平井海蔵・高良齋（一七九九—一八四六）・山口行齋（一七八五—一八三二）等（此中美馬は賀川氏の産論・石坂氏の鍼治説を蘭訳して “Verhandlungen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetensch-

appen', No. 10 en No. 14 に載せたるは日本人の医学上文獻の歐文雜誌に載りたる嚆矢なるべし)の他に、外科に長じて開國の藩侯伊達宗城の侍医となりし二宮敬作(一八〇四—一八六二)・徳川幕府の侍医長として蘭医の巨擘として勢望權威の隆々たりし伊東玄朴(一八〇〇—一八七二)と戸塚静海(一七九九—一八七六)・竹内玄同(一七九五—一八八〇)等三人・佐賀藩の侍医大石良英(一八六五死)・長州藩の侍医兼教授青木周弼(シムシヒツ)・加州藩の侍医兼教授黒川良安(一八一七—一八九〇)・京都に於て種痘所を開きて盛名ありし日野鼎哉(一七九七—一八五〇)・製船と兵学とにて水戸藩の教授たりし幡崎鼎・水戸の本間と称へられ外科を以て神の如く敬重されし本間玄調(一八〇四—一八七二)なほ徳川幕府の末年に開藩を主催して国事犯に問はれ問はれんとして、自刃して王政復古の魁として有名なる高野長英(一八〇四—一八五〇)小關三英(おせき)(一七八七—一八三九)なども皆其頃長崎に留学してシーボルトの門下でありしものなり。此の如き人々を介してシーボルトの学問知識は此時のみならず其後永く我邦に伝はり種々の方面に於て我邦近時の文化的開拓をなしたるなり。シーボルトは長崎に於て医学を施し医学を教へ夙に植物園を出島鳴滝に置きなどして植物学上其他万有学の知識を我に伝へしのみならず彼は前掲の目的にもある如く日本の国土、地理歴史・人類学上人種学上の研究などは或は学生に問題として求めその答案によりて之を知り、或は此の如き人々及び幾多の患者又その親戚知人より教授上又は治療を受けたる謝礼の意味に於て各方面・各地域より齎されたる材料によりてこれを得たり。

シーボルトが江戸参府によりて得たる知識は更に之を増したるものありしなり。一八二三年に來朝して長崎に滞在すること滿二年半、彼の研究材料は既に中々に豊富なりしなり、されど此度は數百里を内地を貫ぬきて多數の人々に接し、多數の状況を察しその国土、其建設、その間に行はる々風俗習慣などを実際に目撃、聴受したること、彼に伴なへる公吏の他に日本の四医師(前に挙げたる湊・高・二宮の他に渡邊幸造あり)、画師として長崎以來親くせる川原慶賀(シーボルトの紀行には Tojousuke とあり)などにて、終りの医師が治療手術に助手として働きし外に湊は殊に植物・動物の採集に力を添へし如く、蘭館書記として同行せるビュルゲルは鉱物の採集、化学的の研索を分担し、川原は到る處に於て景色又植物のスケ

ッチをなしたり（慶賀の画はシーボルトの著書『日本』及植物志“Nippon”, “Flora japonica”の中にも載せたり）。至る所に於てシーボルトがかゝる人々を伴ひて、その経履及觀察を遂げて自から知り之に問ひ質して見得たることは彼が今日吾人に残したる見識を造り、その智得を増したること勿論なるが、此旅行に於て彼が至る所に於て接見したるは皆当時有名なる学者殊に医師なりき。そはシーボルトの“Reise nach dem Hofe des Sjogun”の中に記したる所によりて知るべく。その人々は京都にて小森義啓 (Hikonoske) (一七八二—一八四三)・新宮碩 (Riotei) (一七八七—一八五四)・名古屋 (宮) にて水谷助六 (Zukuroku) (一七九一—一八三三)・伊藤圭介 (Kaisuke) (一八〇三—一九〇一)・大河内存真 (Obutsi Somsin) (一七九六—一八八三)・江戸即ち今の東京にて、大名にて島津・奥平両侯等蘭学鼻眞の外に桂川甫賢 (Wilhelmus Botanicus) (一七九七—一八四四)・宇田川榕庵 (Joan) (一七九八—一八四六)・大槻玄澤 (Gentoku) (一七五七—一八二七)・最上徳内 (Mogami Tokunai) (一七五四—一八三六)・高橋作左衛門 (Hofastronom, Globius) (一七八五—一八二九)・石坂宗哲 (Sotets) (一七八〇—一八四〇)・栗本瑞見 (Sugen) (一七五六—一八三四) 等にして此外にシーボルト事件 (シーボルト自の云々一八二八年の “strange Untersuchung”) と関係深かりし幕府の侍医士生玄碩 (一七六八—一八五四) 及びシーボルトが其著『日本』の中に挙げたる「東韃紀行」 (“Tōtatsu Kikō”, シーボルトの『日本』にかく記す) の著者、間宮林蔵 (Rinsō) (一七七五—一八四四) につきては甲はただ眼科医として紀行中に挙げられ (其名は云はず)、乙は其著書の殆んど全部の翻訳記載あるのみ。此中大槻は日本の西洋學術の初期に於けるオーソリチーとし、小森は京都地方に於ける蘭法実地医家とし又皇室の侍医として共に西洋學術又医学に關する著書も多く、桂川・栗本・宇田川は其學問才識を以て徳川家又地方藩侯の侍医として何れも日本人の普く敬重せる學者にして、栗本は鳥・魚・虫等につきて名ある専門本モノグラフを著はし桂川が蝦夷の本草につき、石鏃の蒐集についてシーボルトを裨益したことはシーボルトの記載する所なり。水谷は名古屋地方の有数なる植物學者にして其頃既にリンネ Linné の系統 (システム) によりて日本の植物に一々羅典名を附け居たるにてシーボルトの注目を惹きたりといふ。伊藤圭介はその門人にして、後に直接シーボルトの門人となり明治中植物學の泰斗として理學博士男爵となりし人なり。特に毛色の

異なりたるは蝦夷樺太探險家最上と幕府天文方、書物奉行高橋にして、シーボルトの日本国土地□に関する知識は大部分は此二人又間宮より之を得たるならん。そはシーボルトの『日本』を繕きし人々の疾くに知るところなり。シーボルト自身の一行程には高・二宮・渡邊あり、又和蘭人部屋付として才学とも優れたる其頃は苗字なき藤平後の曙崎鼎あり、対応せる人々には此の如き学者志士あり。其紹介助力によりて、研求の材料をも貴重なるもの秘密なるものまで手に入れ、又色々の方面に研究を恣にすることを得たれば、彼シーボルトが此際に日本人の智識開発と西洋學術の紹介とに力を尽し、万有学的実験、化学的反応、種痘の試用、眼科手術の供覧などしたると同時に日本に関する万般の知識を自己に扶植したること一通りならず。

長崎に於けると、江戸参府と往復旅中とに得たる知識的及物質的材料の整頓編輯は彼の有名なる『日本』となりて、世間に發表せられ、十九世紀の前半に於て我二百年來ケンペルが“eine notwendige Trennung”と云ひたる程に内外人とも当然として堅く鎖錮したる此日本を広く詳しく正しく確かに世界に紹介したるなり。彼が日本に関する記事を見よ、彼が図画によりて紹介したる日本の国土人民風俗習慣日用の施設器具其他を見て、彼が如何にその材料を十分に豊富に拾集したるか如何に日本を正直に割合に誤謬なく世界の眼前に明らかに表現したるかを見よ。

然るに一八二八年シーボルトが日本に在ること満五年にして任期も満ちて帰国せんとするに及びて、図らずも前に記したる審理事件起れり。是れシーボルトの生涯並びにその日本に関する研究の一頓挫として重要なことにして而も欧米人士の十分に確知せざることなれば、こゝに聊か其顛末を述べん。此件につき重要な關係あるはシーボルトが江戸滞在中高橋作左衛門及び土生玄碩との学問的交渉にして。高橋は前記の如き職務に当り居たるが、シーボルトが江戸に來りしとき、その行李中には、ナポレオンの戦記・クルーゼンステルンの世界一週記・蘭領東印度の九枚地図あり。高橋は此等が皆当時の日本政策に重要なを知りて海外の大勢を知るは我邦の利益と之を手に入れんと考へ、シーボルトは又日本の詳細なる地図（此頃最も欧米に不明なりし日本北辺の地図も）を手に入れんと欲し居たるが、高橋の要求をききて、シーボルト

は自分の要求を満足させなば書籍地図を高橋に授けんと云ひ、高橋は地図は国外帯出の禁制品にして、之を外人に与ふるが如きは重罪に当るを知りながら国益のためとて強めて之を以てシーボルト所持の歴史書籍と交換したり。土生玄碩は眼科学の權威にして当時既に瞳孔切開術を創意施術したる程の大家なるが、シーボルトが江戸に於て眼科手術にペラドンナを用ひたるを見、それが何葉なるやを知らんとせしが、シーボルトが容易に教へざりしかば遂に徳川將軍より賜はりし三葉葵の御紋服を与へて、その薬物を知り、是も猥りに他人殊に外人に与ふるが如きは其罪軽からざるを濟世上の利益には一身を顧みるに違あらずとて之を断行せるなり。然るに此事はシーボルト事件の難問となりたり。シーボルト事件は如何にして発覚したるや。シーボルトは署名を明らかにせず小荷物を一八二八年二月十五日高橋に贈り、其中にはなほ間宮に贈るべき木綿一反と間宮の探險旅行を称揚する書面ありたり。間宮は幕府の法規によつて之を其筋に提出したるより、高橋が或外人との交渉も幕吏にて知り、頻々探偵の歩を進めつつありたるに（その間に）シーボルト高橋間には猶ほ幾度か書状物品の遣り取りありたり、同年九月十八日東南の大風九州地方殊に長崎を襲ひて市中港内に甚しき惨害を与へたることシーボルトの自から記する所の如くありき。シーボルトは前記の如く帰国せんと準備も略成りてその荷物は和蘭の帆前船に積込みてありしが強風驕波に煽られて海岸に打上げられて難破し、例規によりて積荷を解き検むることとなりて、シーボルトの荷物中より国禁の品々続々として露はれ出でたり。幕府にて其後も取調に注意を重ねたるならん。同年十一月十六日に至りて高橋は突然捕縛せられて町奉行所 *Government* にて取調べ評定所に廻はされ、シーボルトより得たる書籍地図等を没収され其外シーボルトとの往復書面によつて学問上の交際、科学的機械等の受領が分明となり、江戸の獄屋に囚はれて翌年三月未決の儘死亡。高橋が逮捕されて江戸より其急使は十二月七日に長崎に達し、同十六日検使は出島に向ひてシーボルトの訊問を開始し和蘭人にあらず露西亜のためにする国事探偵なるべしと認めて出島に幽閉して猥に外出するを禁じ、種々の蒐集材料の出処関係せる人々の姓名等一々取調べたるがシーボルトは之に關して口を緘して連累の恐ある友人の名を云はず。その蒐集材料の内一部は審理が嚴重なりしたため奉行所に引渡し、一部は審理進行中都合のた

め日本に於ける知人門生を救はんがために同じく奉行所に差出し、かゝる際にも猶ほ自分の研究殊に日本の地文の研究を遂げんがために聊なりとも失ふことの少なからんことに勉め、高橋作左衛門が身にかけて与へ呉れたる日本地図はなるべく之を引渡さざらんと志し、家宅搜索のあらんを予知せるの日咄嗟の間に夜を□めて重要なる地図を写し取りて、本の図を差出し、又日本国志(歴史及記載)の研究論纂に欠くべからざる材料地図・原本・写本刻本などを箱詰にして隠匿し、又審理進行中にも此等を箱にして舎宅の壁の中に匿くし、或は猿を飼ふ箱の下引出に地図を匿くしたることなどあり。されば吏員が度々の家宅捜査に於てシーボルトの所持する禁制の図書全部神仏奉仕の器具等を初め押収したりと思へるが實際に於て其大部分はシーボルトの手に残りて後に歐洲に伝へられたり。それ等はシーボルトの『日本』テレキーの『日本地図史』(Tsch. Atlas zur Geschichte der Kartographie der japanischen Inseln)などに掲げたる図にて見る如きものすら然るなり。

一八二九年一月二十八日シーボルトが受けたる訊問は二十四箇条にして、そはシーボルト高橋の往復文書を証拠としたるものにて、シーボルトに関する取調中の主要なるものなり。一ツ一八二六年不明月廿六日、一八二七年四月、一八二七年八月廿四日、一八二八年二月廿七日日附に高橋に書状を発送せしや。一ツ一八二七年七月十九日、一八二八年春日附高橋の書状を受領せるや。一ツ江戸の地志を編纂せしことありや。一ツ自分経履したる諸地方の経緯度を測量したることありや。一ツ門人に気圧計を以て富士山を測量させしことありや。一ツその測量法を高橋に伝授せしことありや。一ツ温泉<sup>ウッセン</sup>岳・鳥海山・白山・御嶽などを測量せしことありや。一ツ高橋より日本地図・朝鮮地図・江戸絵図・其他の地図・間宮林蔵の著述等を受取りたるや。一ツ同人より琉球地図・海門海峡の図など借入れ写取りたるや。一ツ同人に長崎湊図、マキシマ記入の日本西南地方の図、クルーゼンステルン著述四冊・マレイ辞書・地理書四五冊・蝦夷の記事・プラネタリウム・気圧計・キュンストキム・佩剣の帯・Kranz・金サナダ等を送りたるや。一ツ同人へコロノメートルを送付する約束せしや。その他日本指掌細見図の九州辺の部分、長崎の細かき図、日本の図並朝鮮蝦夷カムサッカ迄認めたもの、其他朝鮮琉球蝦夷の各独立図、日本の三つに切りたる地図、九枚の蘭紙に認めたる日本切絵図など地図絵図などをシーボルトが

所持するは、その往返につき何人に頼みて送り届け、何人の手よりこれを受取たるや等は其内容なり。(余の著『シーボルト先生其生涯及功業』乙篇“Differentie brieven in het bezit van de familie H. Sewak”及び“Eigenhandige brieven van het hoofd der tolken bij de behandeling van v. Seibold's zaak, NAKAYAMA SAKUSABURO”に兩人の交換書状並びに當時の訊問書及答弁を載せたり)。

十二月十六日シーボルトの取調開始とともにシーボルト荷物<sup>6</sup>を封印し、其内禁制品は没収しシーボルトの出発(帰国)を差留め、其後一八二九年シーボルトに対し国禁(追放不可再渡来)を言渡せるまでに本人及び関係「者」に対し度々の訊問や取調ありたるが、大通詞馬場為八郎・小通詞吉雄忠次郎・小通詞並堀儀左衛門・小通詞末席稲部市五郎は高橋との書物書冊等取次のため入牢、馬場・吉雄・稲部は事件着落後に地方藩侯に永の禁錮、二宮敬作・高良齋・渡邊幸造は門人として、川原登與助も之に関係ありとして入牢となり其他にも大勢の訊問を受けそれぞれ処罰されたるあり。職責上につき長崎奉行、一九二六年の蘭使一行の附添検使など罰責されたるもの四十人ばかりに及び「たり」。

右審理中シーボルトは江戸参府当時書籍物品等を諸方より貰ひ受け買ひ入れたること少なからず。それにつき奉行所にて度々召換して之を問ひ質したるも、シーボルトはそれを申告すれば好意を以て自分に物を呉れ物を紹介したる友人知人を連累に陥めれんことを恐れて少も之を申立てず、遂には本国にある老母のことを心配しながらも自分の戸籍を日本に移して日本の為を謀る故か、るる訊問を中止されんことを申出でたる程なりき。然るに此間に於て此審理を纏りて別種の罪人を出だしたり。そは前記土生玄碩にして、彼は將軍侍医として当時眼科のオーソリチーなりしが、或日シーボルトが荻宏を以て瞳孔を拡大して眼内手術をするを試して参席者に示したるより、何とかして此薬方を知らん其伝授を受けんとしたるが、シーボルトは高橋に対する洋書を日本地図に代へたるが如く、土生が日本將軍より拝領の紋服を着るを見て之を得んと希望するを聞き知り是を他に譲与する如きは將軍に対する軽蔑となるを知りながら、眼病者救済のためならば重き罰を受くるとも本懐なりとて之をシーボルトに与へて荻宏にての開瞳孔を知り日本の眼科界を益したが、シーボルト審理

の結尾となりしとき一八三〇年一月十日土生は永く牢内にありし後免職褫禄となり、其子も侍医にてありしが此事に關係して同様の処分を受けたり。

長崎及び江戸に於ける各方面に於ける審理の結了するや日本の關係者に宣告の下るに先ち一八二九年十月二十二日シーボルトに対し、天文方役人又は医師蘭学者又は江戸滞在在中往復旅中に於て治療せる者どもより禁制品など貰ひながら通詞にも不申通受納し初め取調の際に陳述に偽ありしは不都合ありとて其品々没収の上以來国禁(禁入国)を申渡されたり。シーボルトの日本旅行はこゝにて其幕を閉せり。

シーボルトが日本に関する功績は日本をその鎖国時代に世界全般に明らかに紹介せるにあるは前にも述べたり。

そは彼の著者『日本』(“Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan u.s.w.”), “Fauna japonica” 及び “Flora japonica” に載せたる所にて世人の一般によく知る所なり。甲が日本の国土、人民を諸方面に亘りて精記して之を補ふに実に会ひたる見事な図画を以てせる通り乙は日本の動物を、丙は日本の植物を記述と絵画とを以て詳記して今日なほ日本の其道々の専門家の座右に欠くべからざる空前の大著述を残したるものにして、之と同時にシーボルトに日本動植物に関する知識と材料とを供給したる其頃の我邦学者の名が之によりて西洋に伝はりたるは『日本』の附近諸国の篇に間宮林蔵の「東鞆紀行」を訳述して、我國の探險家の名を地理学問界に弘けたると同一揆なり。前に挙げたる人々の内宇田川榕庵・水谷助六・伊藤圭介・最上徳内・二宮敬作・桂川甫賢及びシーボルト東渡時分より前に死せる植物学の大家小野蘭山(一七二九—一八一〇)などの名は之によりて欧米に紹介されたり。シーボルトが『日本』に於て日本に關して諸方面の研究を遂げて我邦を益し之を世に紹介したるに就きては之を其書自身に譲りて之を繰返さず。余は只シーボルト身親ミナトから我國我人を裨益したる点につきて左に少しく陳べん。それにつきて述べたきは彼の医学に關する影響なり。

ウエルツブルグ大学を卒業して二三年開業の後直ちに東洋に來航し、その年齢経歴より見れば經驗の深淺・蘊蓄の豊瘠は略之を察するに難からず。然れども凡そ學問技芸は一代に興り一朝に榮ふるものにあらず。彼は學問の澗藪たる中欧よ

り来り、医学の権与たりしウェルツブルグに人となりたり。当時我邦に於ける西洋医学の知識程度に比べては丹鶴が烏雀の群中に立ちたるが如くありしならん、一匙の薬、一技の能、一言半句の果までも皆周囲の模範典型となりしこと疑なし。昔に医界のみならず学界のみならず、一般社会まで其風采を仰ぎ警顔に接したるものより一様に感服推称されたるならん。

シーボルトは出島にありて其職責は和蘭館内の病人を診療するにありたり。而も其間には自己の研究の爲にする所もありたるならん。我邦人に医薬を施し又學術を伝習するによりて我邦人を救ひ教へ、又幾多の邦人に接することに苦心したり。シーボルトは医学士として医学諸科に亘り通曉したるならん其中得意とせるは内科外科眼科産科等なりしが如く、殊に外科と産科とは治療の成績もよかりしかば出島にある二三年間に「蘭館に今迄になき名医来れり」との評判は遠近に響きて、近き地方は勿論遠国より従学のため又治療を受くるために来るもの一日一日と多くなりしが、和蘭館の出入は其当時甚嚴重にして、又蘭医が日本病人を手掛ることを禁じたれば、シーボルトが接すること極めて困難なりしならん。長崎近傍の人は蘭医に対する信用極めて篤くして、何とか口実を設けて館内に入りたるが、遂に長崎奉行より幕府に稟請して遂に従来の慣例を破り嚴禁を弛めてシーボルトの治療のために出島より外出するを許可したれば、シーボルトは長崎及其近傍に往診することを得又隔日に長崎通詞出身の吉雄幸載榎林榮建二氏の住宅に出張して診療に従事するを得たり。其後病者も見学者も数多くなるに及び医学、植物学、其他西洋の学問を門下の人々に教授するために一八二四年頃家塾として鳴滝に別荘を求め、是れ此迄に例のなきことなりしもシーボルトの学識技術が長崎奉行をして之を許さしめたるなり。こゝにて病人の治療・学生に対する講義をなしそれは一週間に一回なりしが、其間に吉雄榎林二氏は有志医師と共に病人を選び置き、それを鳴滝に出してはシーボルトの意見を質ね説明を聞き手術するのを見たるが、その様は今日の所謂臨牀講義に似たるものなりしといふ。是れ即ち我邦医学の一大革新にして、従来の日本に於ける医学の学び方は多くは外人の口より耳に聞きたるを人より人に伝へて聞きたるもの、或は書物に就いて読み覚えたる臆測的のものなりしが、シーボルト

トの教授法によりて、ここに実地の病牀に臨みて、之を批判し講述し、診断を下し之によりて治療を加ふることとなり、是に於て現在の医学もする真の臨牀的医学講習法・研究法が我邦に初めて起りたり。此点に於てシーボルトは我邦に於ける医学講究法の始祖として、今日の進歩は之に初まりたるにて、其功実に偉大なりと云はざるを得ず。

其当時我邦に於て外科学的手術療法はまだ発達せざりし故我邦の外療家と比較するときは〔華岡震（一七六〇—一八三五）本間玄調（一八〇四—一八七二）鎌田玄臺（一七九四—一八五四）の如き大家はありたれども〕遙に豊富なる学識と頗る巧妙なる技術の持主なりしこと争ふべからず。最初に施したる手術は腹水穿刺なりしと云ひ、その他方書に散見する所にては陰囊水腫・兔唇・乳癌其他種々の癌腫・種々の膿漏瘻孔に施術しそれには全身麻醉の下に手術したるもありたり。眼科に於ては其当時前記の土生（此人シーボルトの門人とするは誤なり）の如き独創の白内障手術をする人もありしが、Bohnの紅彩切開術を日本に於て初めて施したるはシーボルトなり。之に就いて當時の日本眼科医も可謂絶技と賞めて居る位である。産科は賀川流と称へて日本に早くより発達し居たるが、その家又其門人には西洋の鉗子を伝へたるが皆独創の鯨骨網布製のものあつて西洋鉗子は用ゐざりし。シーボルトは之を携へ来りて之を實際に応用し、日本に於ける其娘稻は後に日本に於て最初の女医とし産科を以て家をなしたり。シーボルトは又助産婦として日本婦人を少人数ながら養成したり。内科につきては門人戸塚等の処方録今も残れり。シーボルトは又熱心なる動植物研究者なりしかば、此方面よりしても日本の医学本草学者に裨益を与へたるは問はずして明らかなり。

シーボルトが長崎に來り名医と云はれて四方より門人の多くありしが其頃の有名な日本の眼科医本庄普一が「シーボルト頗る声誉あり。故に笈を投じて事に従ふの徒水の如く会し雲の如く聚る、日一日より多し」と云ふて居る。是れ独仏の學術殊には医学が十八世紀の末頃に一時に勃興したるにより、シーボルトがその学界の本場よりは等大学の功業を背負ひて入国したるにもよらん。彼の日本学界に与へたる影響が十七世紀の中頃來朝のスハンベルゲン、其世紀の終なるケンブエル、十八世紀の末なるチュンペリー等に比して比較ならぬ程宏大なりしは我邦の文化が其時代に比すれば漸次進歩し來

りて異邦の文化思想を輸入するに其地歩根抵を得たるにもよるならん。然も亦シーボルトの人物の崇高にして我邦の武士に似たる所あり、その学問拔群にして従来の一通りの学医とは異なりしによらずんばあらず。その声名をきくその學術を慕ひ、時の杏林はその高風に抑靡され、全国の医流はその洪波に誘はれて蘭学者は勿論、漢方医者輩までもなだれを打て長崎に押寄せ敢て後れざらんとして競へり。美馬・二宮・岡・高・伊東・戸塚・竹内・高野・小關など徳川末世の医門の俊傑が殆んどすべてその門に出入したる人々なりしはシーボルトの功名をして猶一層盛大ならしめたるが、殊に其功績として掲ぐべきは従来多年間机上の空論・紙上の陳説にて心に得手に熟<sup>ナ</sup>れて執行すること叶はざりし幾多の療法・手術がシーボルトの指導解説によりて自由自在に応用すべきものとなりたることなり。シーボルトは我邦眼科に莩莖を紹介し、外科に脱腸帯を紹介し、助産の鈎を紹介し（此産科用鈎は今も長崎県立図書館に貯蔵せり）、殊に種痘に関してはシーボルト及び其門下の功績は著しきものなりし。シーボルトは長崎滞在中三人の児童に種痘を試み一八二六年江戸滞在中幕府侍医諸氏に種痘の術式を示し試みたるも、其時ジャワより携へ来りたる痘漿が腐敗していづれも用をなさざりしが、其後二十年を経過するまでにシーボルト門下榎林榮建・伊東・本間・大石良英・日野鼎哉・日高涼臺等諸氏は諸地方に於て種痘のために、或は著書に或は研究に尽力したるが、種痘が完全に行はれて漸次に今日に至りたるは一八四九年榎林宗建が之を爪哇より得たるを最初とし、一八五六年江戸に種痘所の設立されたるより次第に行はるゝに至りしが此種痘所は伊東・戸塚・竹内等諸人の発企にて成立したるなり。此三人殊に伊東は才氣人に優れて治療に長じ「たり」。当時の医界は漢方家の支配する所にて其權威は徳川幕府の侍医局にあり其同僚は殆ど皆漢方医のみなりき。一八四九年には漢方医の圧迫にて和蘭医術は禁制となりし程なるに、一八五八年此三人が幕府の侍医に登庸されてより、蘭方医は次第に其勢を伸張するに至り間もなく王政一新となりて西洋医学の勃興となり、以て今日に至りたり。

シーボルトは一八二九年十月二十二日長崎に於て審理を終り彼が地図地理書・軍器・武器等の如きを持去らんとせしは、偏に日本を研究悉知せんとするの目的に出でて決して政略上の目的にはあざざりしとは云へ、当時の禁令を破りたる

ことなればその罪条を云ひ立てて日本御構と云ふことにて次回の便船にて日本を去り永く再び日本に渡来することを禁止すと言ひ渡され、シーボルトは同年十二月二十日出島出發して日本を去れり。

されど時世の変遷は遂にシーボルトの再渡来を許し、それまではシーボルトは故国和蘭にありて、日本に関する著書を編輯し、日本の開港・貿易等のことにつきて公私に從來尽力する所ありし結果、和蘭王が我邦に対する開港忠告書、米國普國の開港要求使節などありて、安政年間に（一八五六年及び一八五八年に）日蘭の修交条約・通商条約の成立するに及びてシーボルトの放逐令も撤去となり「たり」。日本政府にてもシーボルトは再び渡来することあるまじと想ひしに、一八五九年彼は六十三歳の老人として、嘗て日本の商業に付き和蘭商事会社 *Nederlandsche Handelsmaatschappij* の長崎代理店 *Handelsagentur* を設立すべき建議をなしたるが、実行されるにつき、その評議員 *Adviseur* として日本に來りたり。彼が再航は医学上の応用即ち治療及びその講習（前回と同様鳴瀆でした）にあったこと勿論であるが、其他にも暫時ながら徳川幕府の政治に参与したので日本は何かと有利であった。何よりも悦ばしかったのは前回の門人二宮敬作・伊藤圭介と再会したことであり、又前回の門人伊東・戸塚・竹内が幕府の侍医筆頭として威権赫々たりしことであった。當時の侍医大槻俊齋・林洞海・松本良甫等と接見して彼の意見を交付したこと、此時の門人河野禎造（一八一七—一八七二）が農業学を以て、清水東谷（一八四二—一九〇七）が写真術を以て世に名あり、又後の帝大総長加藤弘之（一八三六—一九一六）は国法学につき、市川兼恭（一八一八—一八九九）とて越前侯のため製砲鑄身を担任し幕府のため電信機取扱を取調べたる人が独逸語学につき、杉亨二（一八二八—一九一七）といふ日本統計学の始祖が之に就いて益を受けたなど近き頃まで人々の記憶する如き医学とは変つた方面に我々にその影響の跡を残して置いたが。それよりも猶變つたことは、彼が徳川幕府の名高き執政安藤對馬守信行（一八一九—一八六九）の知遇を得て、日本に於て最初の外人政治顧問となりしことなり。シーボルト長崎にありて和蘭商事会社支社の顧問として在勤中一八六〇年中頃英仏兩國にて我對馬を租借して海軍根拠地にせんと相談ありし趣なるを聞きて之に對する対応策につき長崎奉行に申出、又同じ頃日本と外國との貨幣引換に關し經濟

上の不均衡につきシーボルトは仏国英國の領事につきて説くことあり、又独逸に其意見を書き送たりたり。安藤は長崎奉行の進言によりて之を承知し、又其頃江戸にて箕作阮甫・杉田成卿などと云ふ蘭學者に命じ、又民間にても相當學者ある「に命じて」医学・砲術・練兵のことなどにつきて「講究せしめ」此等のことは漸次詳細に知れ渡りたるが、政治外交のことにつきては日本人何人も弁へざりし故、又安政五年七月には外国奉行を置きて其事を掌らしめしが外国公使との応接中ミ困難なりしかばシーボルトを江戸に聘して、之に關する顧問とし、シーボルトは早速貿易交通の件、輸出品の檢攷の件、日本と外国との政体の比較、學問の件、種芸・機械の件、海軍を創立すべき件、外交上折衝の件などにつきて調査し、斡旋し、商議し又説明すべきことなどを献議し、当時外国に迫られて江戸・兵庫・大坂の開港を承認したるも、その延期を各国に談判せんと使節任命中なりければ之につき事細かに之に關する注意の条々を挙げて參攷に供し、江戸に出ては午前には學問上其他に就いて質問に答へ、医術其他について教へたる傍に午後には徳川政府の為に心思を勞し、政治上の事柄に就いては書物に符箋を張りて当路者の參考に供したるが、其頃屢々起りたる事件について政府に忠告し、時としては外国奉行の役所に出頭し、安藤閣老に面接することあり。一八六一年七月より日本の外国に對する關係又は外国使臣相互の關係につきてなど、外交上政治上のことに携はり、外国奉行がシーボルト止宿の赤羽外人接遇所（今芝公園わき）に來りてシーボルトの意見を求めたることあり。七月末浪士が英國公使襲撃の際など其間に奔走尽力し、日本政府に對しては其後の処分に関して進言し、之に對して国内の諸大小名に對して諭示すべしとて其案文を安藤に示し、又一英公使館襲撃の歴史的及び政治的説明」と題する文を作りて、歐羅巴に發表（「せり」）。此頃外人に對する一般の傾向は危險甚きものありて、シーボルトの宿所の如き幕府には警衛を盛にして保護し怠りなかりしが、シーボルトの身边には屢々つけ狙ふ壯士もありたり。浪士が安藤閣老を坂下門外に襲撃したるとき、斬奸状を懷にしたる、其上安藤が罪状を教へたる中にシーボルトといへる夷人に對し日本之政務に携はる様頼みたりとの簡条もありし程なりき。シーボルトはなほ永く滯京して日本政府の外交・政治の顧問格にてあらんとせしが、和蘭公使 de Witte の抗議もありて、日本政府も心にもなく之を解雇する

こととなり同年十月十七日シーボルトに之を言渡し、一八六二年の初めシーボルトは遂に、なほ後來時機を得て日本駐在の外交官として国際場裏に活動せんの希望と野心とを抱きながら日本を去り、之を以て和蘭の内閣及び王に説きたれども納れられず。遂に故国ウエルトツブルグに退きて余生を送りし内にも日本の遣欧使節のために仏蘭西の皇帝内閣等に周旋したることあり。彼が生涯の最後の日まで日本を思ひ、日本を慕ひながらにありたり。

解説ならびに注

岡田靖雄

本号に掲載されている「医学文化館に寄託されている呉秀三先生遺品目録」にみるように、C 149の「寄稿誌及び別刷り」に“Ph. Fr. v. Siebold und sein Einfluss auf die japanische Zivilisation der neueren Zeit”の別刷りがあり、またC 150の「自筆原稿など」のなかに、前記のもの同様のタイプ稿および本論文の原稿があった。本論文は日本語では未発表のものである。ところで、C 149のほうの別刷りには、“G. Koff & Co. Welvereden”と出版社名がはいっており、ページ数も四一〇—四二九とはいっているが、どういふ出版物の別刷りかはわからなかつた。

ところが、わたしの『呉秀三——その生涯と業績』（思文閣出版、一九八二年）のための取材の目的で岩生成一先生のところに行かされたとき、ある論文の文献として一九二九年の『バタヴィア学芸協会記念号』Feest bundel der Bataviasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen）に呉先生の論文がのっているところがあるがその論文は未見である、といわれた。それが、この別刷りになっているものであった。ここにかかげる論文は、ドイツ語訳のための日本語初稿とかがれているので、一九二八年か一九二九年のものである。つまり、先生にとっては最後のシーボルト伝となつたものである。

原稿の第一ページは写真としてかかげた。頭初に「乞叱正」とあるので、だれかに目をとおしてもらつたものである、あるいはドイツ語訳を担当した人にわたしたものか。字はあとになると、走り書きのところもあり、また、あとから挿入した句が地の文章とはそのままにはつながらぬところもある。日本語としては完成稿ではない。また、翻訳してもらつたための文章であるので「当時の町年寄（市長）」といった半解説的表現もみられ、また人名にはすべて「宇田川裕庵」などと、すぐにローマ字化できる表記法で仮名がふられている（ただし、本稿では振り仮名は一部分をのぞいて省略した）。

とくに走り書きの呉先生の字は、よみとりにくい。判読の困難な箇所は、先生がかかれたシーボルト関係の他論文およびドイツ語文を参照して判読したが、それでもよみとれぬ字がのこつた。また、「」をつかつた部分は、呉先生の文章が不完全とおもわれる部分を岡田がおぎなつたものである。また、人名の生没年には誤りが目につく（ドイツ語文でも）ので、『シーボルト先生 其生涯及功業』

により一部分訂正したが、その目でみるとこちらにも誤りがかなりある。

この論文がかかれてからすでに五三、四年たつており、その間にシーボルト研究はおおきくすすんでいる。ここでは、呉先生のかかれたことで現在はいきり誤りとされているところだけを注にとりあげた。

また、原論文原稿の校定および注つけについては、順天堂大学医史学研究室酒井シヅさんのご助力をいただいた。本稿の誤りがいくらかでもへっているとすればそれは酒井さんのご助力によるが、全体は岡田の責任でまとめた。ドイツ語文のほうは本号の巻末にかかげたが、その校正は酒井さんがうけもってくださった。

注

- (1) "Reise nach dem Hofe des Sjogun" (キリ「江戸参府紀行」のこと。
- (2) 小関三英の姓は「こせき」であること、またかれは長崎にいったこともシーボルトに入門したこともないことは、山形敵一「医師としてのシーボルト」(日本医史学雑誌、第二〇巻第一号、一九七四年)および山形敵一「小関三英覚書」(同誌、第二五巻第三号、一九七九年)などが指摘している。
- (3) ここは原稿の欄外に、「人名ノ洋字ハシーボルトノ記セシ儘ヲアケタリ」としてなされている。
- (4) ここで一字よみとれないが、この部分に相当するドイツ語は "seine Kenntnisse des japanischen Landes" とある。
- (5) ここでも一字よみとれないが、この部分に相当するドイツ語は "in kurzer Zeit bis in die Nacht hinein" とある。
- (6) 登輿助は川原慶賀の通称である。
- (7) ここは、西洋医学を学びし最初の女医、とかくべきだろう。